



源清流清

令和6年2月3日
第10号
ときわ会東蒲・五泉支部
広報委員会

ふ-かん【俯瞰】高い所から見下ろすこと。全体を上から見ること。部分としての日々の出来事は、この一年をどのように形作ってきたのか。部分は全体に影響を与え、全体もまた部分に影響を与える。全体を俯瞰しつつ部分への意味付けをする時期を迎えようとしている。(五泉市・仙見川にて)

五泉市立川東小学校 佐藤 将臣 (10年度)



黒板を見て思うこと

副支部長 大川 正史
(63年度)

昔、「中学校の授業は、先生が黒板に山ほど板書をして、子どもはそれらをひたすらノートに書き写す講義式の授業だ」と言われることがよくありました。所謂「詰め込み式授業」への警鐘でもあったと思います。

昨今、一人一台端末の導入により課題も学習資料も生徒の端末に届くようになったため、中学校では教師の板書量が減少しました、というか、激減しました。生徒が板書を書き写さなくてよくなったので、空いた時間に「協働的な学び」と称して小グループで学び合いをするようになりました。生徒も慣れたもので、よく話します。しかし、それらによつて授業は改善したかという点、道程は中半だと思えます。なぜなら、教師の発問やそれに対する生徒の考え、それに対する別の生徒の反論、新たな仮説、そこに到達するための論拠等が板書されないのは、詰め込み時代も今も同様だからです。「いやいや、それは各自の思考ツ

ルやワークシートが端末を通して総覧できるから、生徒はいつでも見ることができる」という意見もありましたが、それは支援であつて指導ではないと思います。だから、授業中に生徒が問題意識をもっていないことが多いのではないかと思うのです。

昨今の端末機器を駆使した授業を見ると、最初から終わりまで歌いっぱなしの合唱練習を想起します。中学校の合唱コンクールの練習を学級でするとき、いつもいつも最初から終わりまで曲を通して歌いますか？表現が不十分なところがあればそこで曲を止めて、ダメ出しして、そこで何度か練習しませんか？そうやって焦点化するから生徒の問題意識が高揚し、歌が変わっていくわけです。ね。歌の練習環境を整えるのは支援、曲を止めてダメだしするのが指導でしょう。私たちときわ会員は、是非、指導に力点を置いて研修を深めてもらいたいと願います。

錬 磨 — 教育研究発表会発表者の声 —

教育研究発表会を終えて



五泉南小学校
高橋 義和
(19年度)

教育研究発表会を終えて



村松桜中学校
長谷川 大輔
(19年度)

教育研究発表会を終えて



津川小学校
菊田 薫
(22年度)

体調不良のため、発表できなかったこと

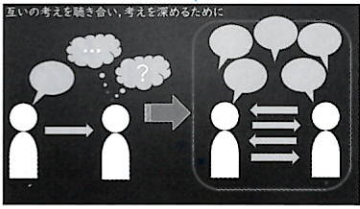


愛宕小学校
田中 孝治
(24年度)

私は、これまで、児童の主体性が求められる場面において、教師の支援だけでなく、周囲の児童の支援も取り入れてきました。しかし、単に周りが解き方を教えるだけでは、主体性の高まりにはつながりにくかったと感じます。そこで、算数の学習において、「児童が考えたいような課題」「互いの考えを聴き合い、考えを深める場」を繰り返して設定することにしました。そうすることで、児童は、目的意識を明確にもち、主体性を高めていくのではないかと考えました。

当日は、ハイブリッド型の発表でした。参加者からは、「学びの自由度が保証された取組・研究は参考になった」「学級経営の基盤が大切なことが分かった」など、共感的なご意見をいただきました。また、「二つの手立てがはたらいたための要件があるのではないか」という、今後の研究の方向についてのご示唆もいただきました。

これまでに、指導いただいた、愛宕小学校佐藤肇様や、東蒲・五泉支部算数・数学部の皆様、感謝申し上げます。今後も実践を積み重ね、児童の主体性を高め



根拠を明確にして考えたことを表現できる生徒の姿を目指して実践を重ねました。中二「電流とそれはたらき」の単元において「電球の明るさの逆転現象」を扱った実践について発表しました。

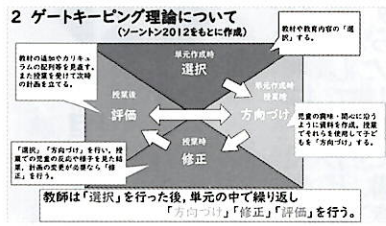
「課題設定の工夫」として、根拠となる要因が複数ある中心課題と、そこから派生して小課題を設定しました。「単元構成の工夫」として、探究活動を中心にしながら、その前後の学習をデザインして実践を行いました。この二つの手立てを講じながら実践を進め、明るさの逆転現象に対する記述内容をもとに検証した結果、実践前よりも根拠を明確にして表現することができたことと評価した生徒が増えました。

発表会当日、参観者の方に、手立ての有効性や他単元での活用法について協議していただき、実践をより深めることができました。自身三回目の教育研究発表会での発表でしたが、気持ちよく発表することができました。最後に、発表に向けてご指導いただいた東蒲・五泉支部理科部員の皆様、三市中東理科教育研究会の皆様、感謝申し上げます。

私は、「ゲートキーピング理論」を導入した社会科授業の構想」という主題で発表しました。社会科の単元学習を構想する際には、教師がゲートキーピング「選択」「方向づけ」「修正」「評価」を行っていくことが主体的学習者育成には欠かせないということを主張しました。

二年間の実践をまとめるのは大変苦労しましたが、社会科グループの先生方のお力を借りて何とか発表を形にすることができました。毎回のグループ研修で悩みながらも自分自身が成長できたのは、間違いなくグループ研修の先生方のおかげです。本当にありがとうございました。

発表当日は、「教師の普段の取組が理論的に示してある」という評価をいただきました。また、「必要の手立てが有効かをさらに検討する必要がある」と課題もいただきました。指導者の白澤道夫先生からは「ゲートキーピングを単元レベルと授業レベルで捉える必要性」や「児童との『協働』を取り入れた指導計画の重要性」についてご指導をいただきました。今後も今回の発表を生かして、研鑽を続けていきたいと思います。



私は、「運動の楽しさと技能の高まりを実感する授業づくり」を主題に設定し、研究内容として「楽しさの共有」「動きの細分化」「運動の場の設定」の三つの手立てを軸に「ネット型（テニソン）」の実践を行いました。

「楽しさの共有」では、ねらい通りに「ラリーをつなぐ楽しさ」を味わうことができていました。運動局面や体の部位に着目した「動きの細分化」においては、児童がよい動き方を言語化することで、クラス全体が技能のポイントを理解することができました。また、児童の気付きや願いを取り入れた「運動の場の設定」により、目的をもった運動する姿が見られました。運動に苦手意識のある児童も含め、多くの児童が、「運動を楽しんだり、技能の高まりを実感したりした」と振り返りに記入したことから、三つの手立てが効果的に運動したと考えます。

最後に、私は、体調不良により教育研究発表会当日に発表することができませんでした。しかし、それまでに東蒲・五泉支部体育部会をはじめ、多くの先生方にご指導ご鞭撻を賜りました。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。



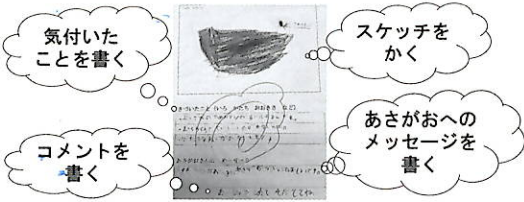
教育研究発表会を終えて



大蒲原小学校
松井 雅裕
(24年度)

私は、「気付きの質を高める児童の育成」表現・交流活動を工夫して」の研究主題で、生活科での実践発表を行いました。

参加者の皆様からは、表現活動について、「メッセージにあさがおへの思いを表出させることで、児童があさがおに深く関わることに繋がった」とご意見をいただきました。また、「児童の気付きに対しての価値付けの内容を分析することで、意図をもって児童に合った価値付けができる」とご指導もいただきました。



交流活動については、「児童から気付きや疑問などを表出させる問いかけを行うことで、交流が活発になる」とご指導いただきました。問いかけについては、生活科以外の学習でも活かせるので、普段の学習の中でも意識して行おうという意欲が湧きました。新たな知見を得る有意義な時間となりました。

気付いたことを書く

スケッチをかく

あさがおへのメッセージを書く

コメントを書く

教育研究発表会を終えて



大蒲原小学校
太田 諒平
(27年度)

令和四年度から全面实施となった高等学校学習指導要領(国語)では、「文学国語」が選択科目となりました。教育における文学の価値が問われる今、文学を読む意義を自分なりに考え研究を重ねました。

私は、小学校で文学を読む意義を、作品に込められたテーマに迫る過程での思考により、人間性を豊かにすることであると考えました。そこで、読みの過程で作品の特徴に応じた見方・考え方を働かせるために、発問の構成を工夫して学習デザインをしました。また、児童の読みの過程を明確化し、他作品の読書行為に活用できるようにしました。

研究発表を通して、物語の設定や構造、語り手に着目させる発問は、作品の特徴に応じた見方・考え方を働かせることに有効であること、活用場面の設定の仕方が重要であることが分かりました。また、言葉の整理や意味付けなど、研究のあり方についても厳しいご意見をいただきました。今回の研究発表での学びを、今後の研究や実践につなげていきたいと思えます。

教育研究発表会に至るまで、何度も検討していただき、ご指導ご鞭撻賜わった東蒲・五泉支部国語部員の皆様、この場を借りて感謝申し上げます。

提言 — OBの声 —

押しでもだめなら
引いてみな



宮川 毅
(42年度)

八〇歳を越えてこんなことを書くことになるとは思いませんでした。教育改革の名のもとに、「自分で考え、表現し、判断する力」を育てることが求められています。

私は新採用の時に三部複式を三年間受けもったことがあり。新採用の一学期ですら必死になって指導？をしましたが、子ども達からは前向きな姿は感じられませんでした。多分、子ども達は私の意気込みのようなものに圧倒されたのだと思います。これではダメだ!!と考え、二期からは各教科毎に基本的な学習の進め方を教え、自分(自分達)の力で学習が進められるように導きました。

委員会や遊びなど学校生活だけでなく家庭でも自己判断を働きかけました。詳しいことは書けません、自分達で考え、ぶつかり合い、支え合うことから関わり合いの面白さを実感し、主体的な姿が見られるように感じました。子どものやる気を引き出すことが学び方の基本になったのかな？

ストレス解消していますか



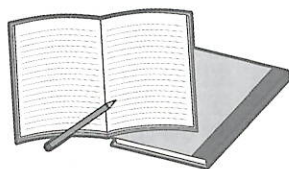
佐々木 均
(56年度)

教職の大変さが問題になっていきます。事務的な業務が多い、学力に責任を負っている、保護者対応、国や地方公共団体の要求の変化に対応など、多忙感はつのるばかりです。

五年前の厚生労働省の調査では、教職員の八割がストレスや悩みを抱えていると警鐘を鳴らしていました。このような状況では教育活動に影響が出かねません。日ごろのストレスを上手に解消していく必要があります。

例えば、私は海釣りをして波間に漂う浮きをながめていたり、スキー場で眼下に広がる冬景色をながめていたりすると、日ごろの多忙感から解放され、とてもポジティブな気持ちになれました。

ストレスがないと思っても、日本人が陥りがちな「ゆでガエル」状態には要注意です。自分に合ったストレス解消法をみつけ、ゆとりをもつて授業をし、子どもたちに接しているか、時々振り返ってみてください。



学校紹介



進取の意気こそ新たに燃ゆれ



五泉小学校

山口 伸也

(7年度)

昨年度、五泉小学校は創立一五〇周年を迎えました。卒業生は一万六〇〇〇人を越えています。私たち教職員は、校歌に出てくる「進取の意気」を胸に秘め、伝統を受け継ぐべく、その時代に合う教育課程の編成を行っています。

「共創力」の育成

時代は令和に変わり、内閣府は日本が目指すべき社会を5.0にバージョンアップさせました。五泉小学校では、その社会に生きる子どもに必要な力を「共創力」とし、対話を通じて共に課題を解決し、新たな考えを創り出す力を育成する教育課程の編成を行いました。



「五小授業モデル」
共創力の育成のためには、日々の授業において、課題の解決を目指す、対話力と情報活用力を繰り返し発揮させる必要があります。そこで、研究部が「五小授業モデル」を作成しました。ポイントは、課題設定において子どもの問題意識を高めること。対話を促すために対話の視点(比較・分類等)や、対話を促す働き掛け(可視化・思考ツール等)を想定すること。汎用性や共通点を問うなどの深い学びを促す働き掛けをすること等です。

「親子ふれあい短歌」づくり
学ぶ子どもの根底には、家族との適切な関わりが重要です。そこで今年度は、夏休みに、自分の将来の夢や頑張りたいこと、家族への思いについて家族と一緒に考え、短歌をつくる機会を設定しました。

Yoku (iki)	Zoku (oku)
千枚千せるよ	その言葉だけで
	おかあさん
	せんたくをする
	ありがとう

教室に親子の心の通い合った短歌が掲示され、おもわず笑みがこぼれる力作がたくさん飾られました。

多様性を認める教育



川東中学校

皆川 将太

(29年度)

今年度は、文部科学省より人権教育総合推進地域事業の指定を受け、多様性を認める教育と題して人権教育に取り組んでいます。

研修会の実施
同和教育とLGBT、発達障害

「おもんない」「何の役にも立たない」という三つ、差別はいまこで起きていて、根拠や理由がなく、する側が人として恥ずかしいことなど、印象に残る言葉が多くありました。多様性、公平性、受容性を大切にし、自分はわかっていないという姿勢を忘れず人権教育、同和教育に取り組みたいです。発達障害とLGBTについては川東小学校との合同研修でした。専門家の知見は勉強になりました。

いじめ見逃しゼロ集会
本校のいじめ見逃しゼロ集会は、年間二回行います。いじめや人権と関連づけた取組を行いました。一回目は新潟お笑い集団NARMARAから講師をお招きし、いじめや人権をテーマに講演をしていただきました。お笑い芸人のお話は様々な角度から物事を見て、考えさせてくれる内容で、生徒にとつて興味深く、楽しく学べたことが振り返りから見取れました。二回目は、本校のスクールカウンセラーの講演でした。いじめの事例をもとに、一く三年生で組

編集後記

第十号発行に際し、ご寄稿頂いた皆様、ありがとうございました。さて、コロナ禍も明け、学校では以前の活動に戻すことも多くなりました。一方、研修や会議などはオンライン、ハイブリッドでも実施されています。ときわ会の取組も同様です。形態は変われども、ときわ会の「志」は不変です。冬季研修総会では九名の方々が発表されました。熱心に取り組まれた研究から全員で研修を深め、更にオンラインで絆を強固にして、会員全員の「ときわプライド」を向上させていきましょう。

んだ小グループで話し合い活動を行いました。三年生がファシリテーターとなり、多面的・多角的に話し合いを進め、考えを深めていたグループが多数見られました。本校が大切にしている「いじめの場の空気を最初に変えるのは傍観者である」という考えを大切にし、互いの違いや多様性を認め合う温かな雰囲気づくりを進めていきます。

